

(147) 栃木県日光市川俣の門森(かどもり) 沢鉦山

三斗小屋鉦山に引き続いて、参考文献(1)を手引きに、本鉦山の探査を行った。文献を読むと、小さな鉦山であったようであるが、図4に複写掲載しているところの現地付近の地質図が添付されていた。この地質図は、現在の地形図と非常に良く地形が一致していること。又、坑口、貯鉦場の位置が明記されていた事等から、この文献を手引きにすれば、鉦山跡を充分確実に確定できると考え、探査に出向いた。なを、文献によれば、本鉦山の鉦石は主として方鉛鉱、僅かに磁硫鉄鉱を伴っている。が、登録鉦種名は「鉛・亜鉛・銅」となっている。

第1回目の探査。鬼怒川に沿って、川俣湖北岸を川俣方面に車で進み、門森沢付近で車を降りた。鬼怒川に降り立ち、門森沢出合いに向かった。眼前に巨大な砂防ダムがあった。写真1参照。足の下に鬼怒川本流の水量も少なくはなかった。増水時には、湖になっていそうである。膝上当りまで水に浸かるならば、渡れそうであった。が、何時も履いている長靴は膝下までである。簡単に徒渉して、砂防ダムに近づけそうもなかった。又、ダムの両端の部分の山の斜面は急峻の様相でもあった。図2の地形図からもそれを見てとれる。

手持ちの地形図(図2参照)を精査してみると、門森沢出合いより少し下流側に、先の切れている林道があり、その途中に、砂防ダムらしい直線線分記号があるのに気がついた。探査である、車で林道入口付近まで戻り、歩いてこの林道に入った。砂防ダムらしい記号は吊り橋であることが分かった。これを渡れば、前述の砂防ダムの上流部に行けそうと考え、道無き道を先に進んで行った。何の困難もなく、砂防ダムの右岸上流部に達することができた。1回目の探査はここまで。この経路で、門森沢鉦山に行けるだろうとの確信を得た。

第2回目の探査。岩友を伴った、1人の目より、2人の目の方が格段に優れているのがわかっているので。探査の結果、鉦山施設跡、貯鉦場跡及び鉦滓跡を確認することができた。これら付近で、容易に方鉛鉱に富んでいる大きな鉦石を採集することができた。しかし、図4に記されている下流部の坑口跡は確認できなかった。砂防ダムの土砂堆積による河床の上昇で埋もれてしまったのかもしれない。上流の坑口跡を目指して沢を遡っていったが、残り約200m手前で、両側が垂直岸壁の小さい深場に出会った。写真9参照。流れは穏やかなのであるが、通常の長靴では無理であるとして、沢の遡上はここで断念した。

探査日 2017年 6月18日、その他

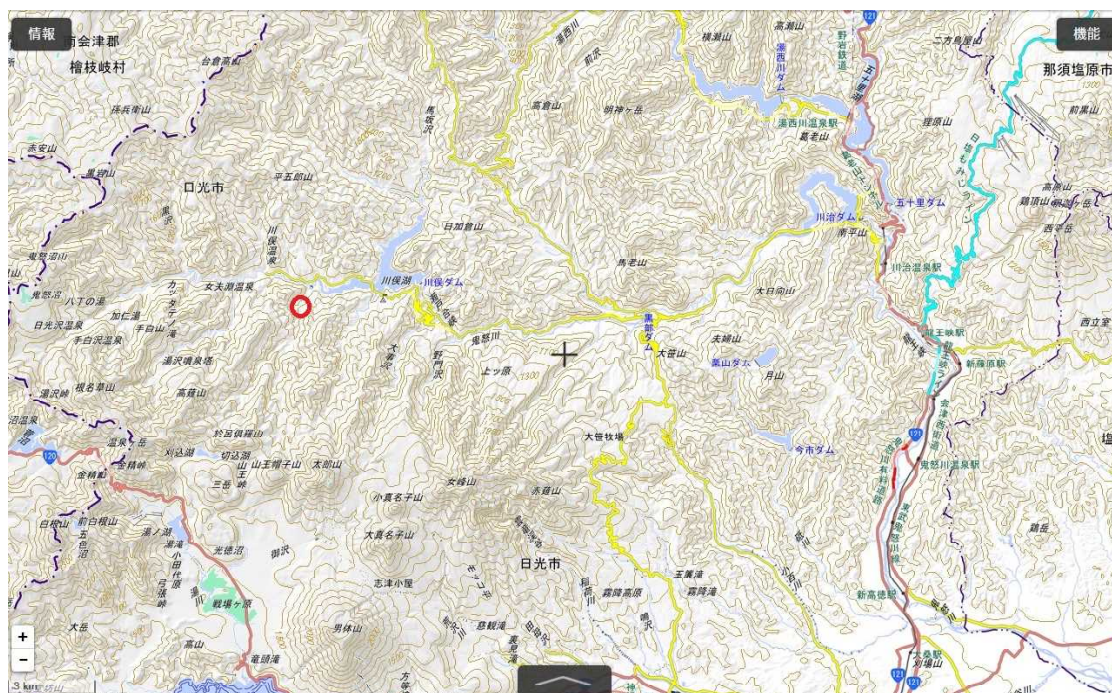


図1 赤丸が門森沢鉦山跡。ダム湖である川俣湖の西端にある、鬼怒川の支流である門森沢の上流に位置している。車から下車して歩くこと約30分で現地である。この付近には多くの観光名所がある。鉦山跡訪問時に、予定に組み入れれば、それも楽しいであろう。

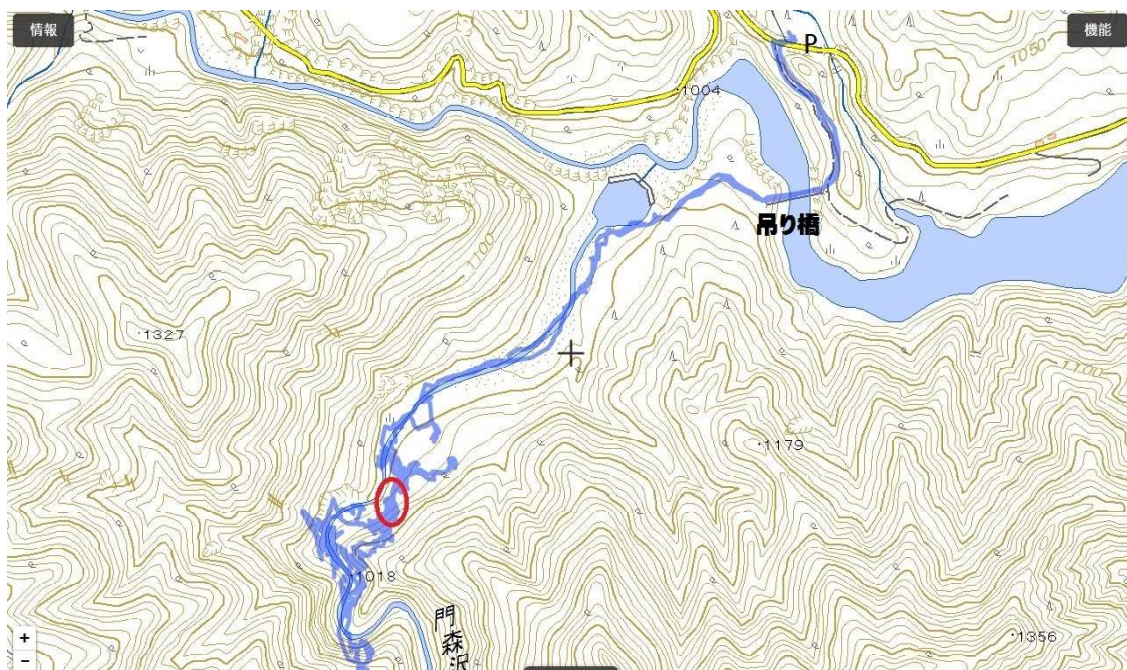


図2 本流である鬼怒川との合流口に、巨大な砂防ダムがある。写真1参照。P点の空き地に駐車。直ぐに林道に入り、吊り橋を渡る。なだらかな山林中を進んで行き、砂防ダムの上流右岸で、平坦な沢に入る。広くなだらかな河床を進んで行く。赤丸付近が貯鉱場+鉱山施設跡。沢の右岸にあり、多段の少し平坦なところにあった。ここから少し上流には、砂防ダム。現地付近の詳細は図3参照。

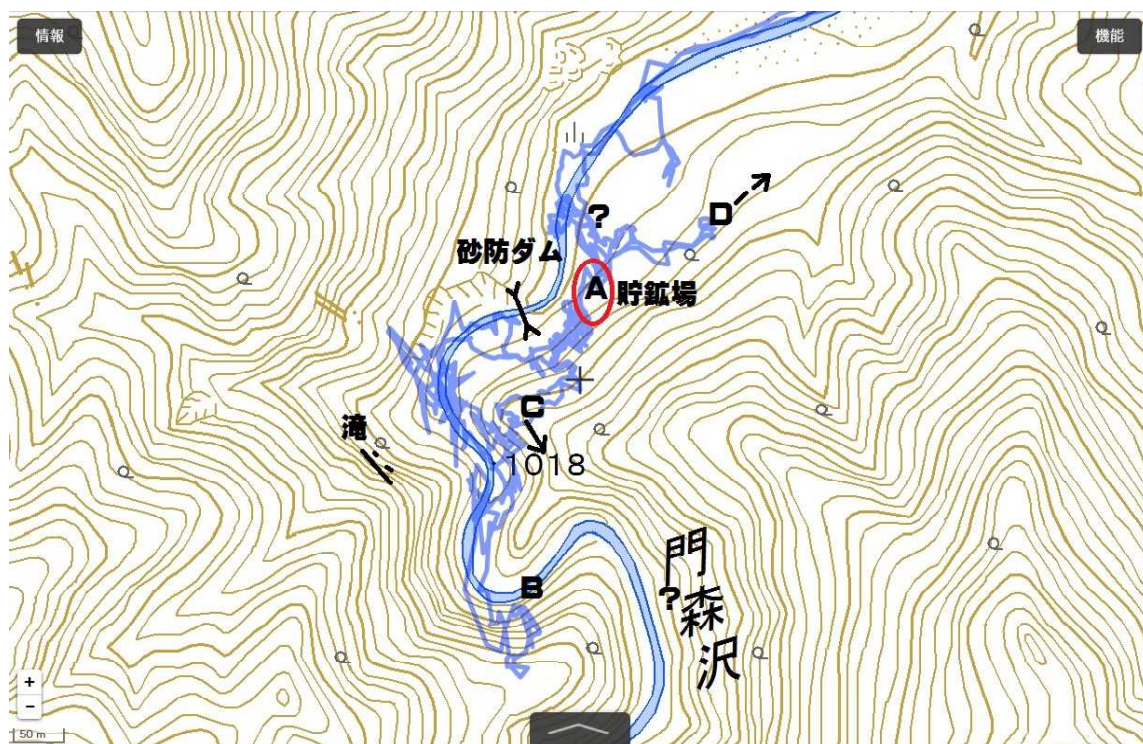


図3 図2の部分拡大図。砂防ダムの上で、下流側を見たのが写真7。この位置で上流を見ると大岸壁の中央部に細い筋状の滝が見えた。落差100mはあるのではないか。写真8参照。A点が鉱山施設跡。B点が第2回探査で辿り着いた最上流部。前方に深みがあり、両岸が断崖絶壁。写真9参照。この付近は「ゴルジュ」であり、さすがにガーミンの受信状況も悪く、経路曲線のバラツキが大きい。ここから後200m程で、上流部の坑口跡と予想したが。前進を断念。砂防ダム付近に戻り、山の斜

面を観察すると、微かに山道らしい跡があった。これを登り上がると、山の斜面水平に、極めて狭いが、明らかな鉱山道を見いだした。途中途中に、さび付いた金属帯が残っていたのである。道の補強材と使用したものである。道に沿って、あちこちにある。道は断崖絶壁中の道であり、ほぼ落石土砂で埋もれてもいるし、部分的に崩れてもいる。道は先には続いていたが、滑落の危険を感じて、C点で戻った。A点からは、切り通しを経由して幅のある林道が延びていた。先に進んでD点まで達した。林道はD点より先に伸びている事を確認して、A点に戻った。この道は門森沢の右岸に沿って、鬼怒川本流に繋がる林道であったと判断した。

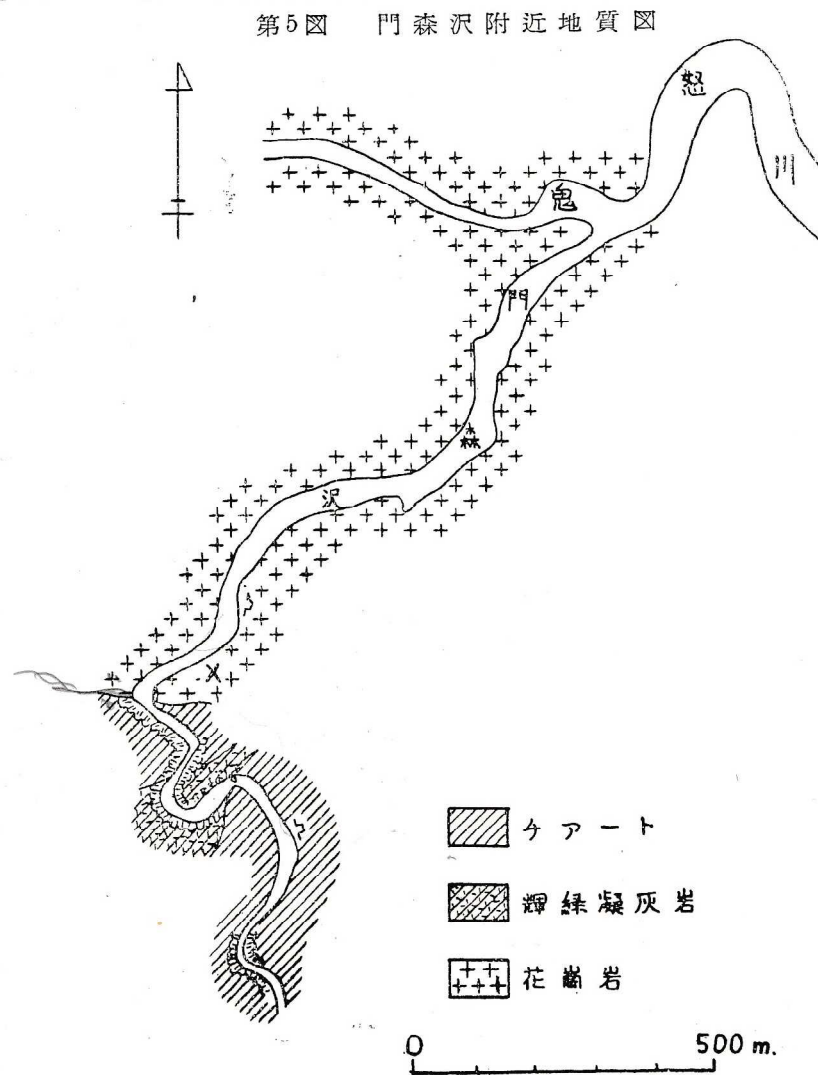


図4 参考文献(1)からの転写。現在の地形図2と対照すると良い。坑口記号が2つ記されている。×印は貯鉱場という説明文が付いていた。文献中に「・・・鉱床所在地に至には、・・・門森沢を徒渉しつつ上流に向かって1 km乃至1.5 kmで到達する」の記述がある。この坑口は、大崩壊によって埋もれており、周りは断崖絶壁であるとか。60年も前の記述である。現在はどうなっているのか、確認してみたかったが。探查結果として×印は確認した。2つの坑口は未確認。

鉾山跡写真



写真1 門森沢出合いの巨大な砂防ダム。鬼怒川本流の河床から撮影。図2から、ダムの規模が知れる。このダムによる土砂の堆積で、ダム上流は大分上流まで、なだらかな河床となっている。入口の乗り越えは絶望的だが。

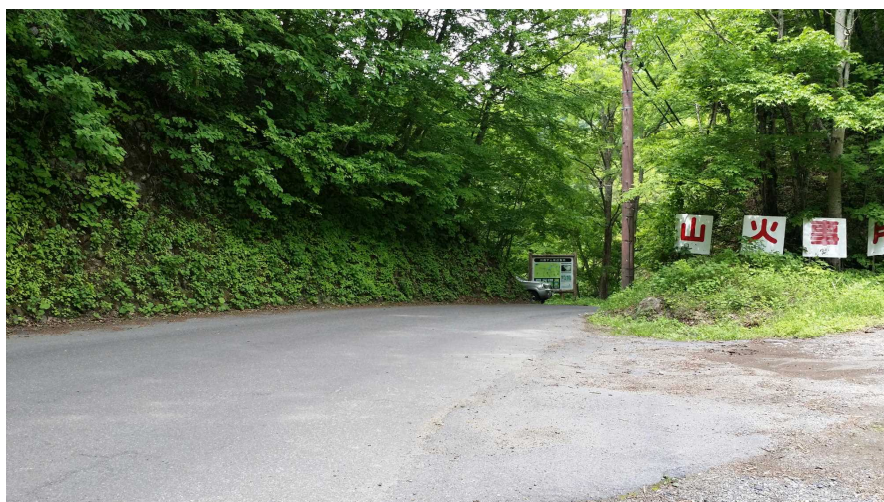


写真2 川俣温泉に向かう県道のこの所の空き地に駐車する。ここから、前方左側にある案内看板のところの林道に入っていく。

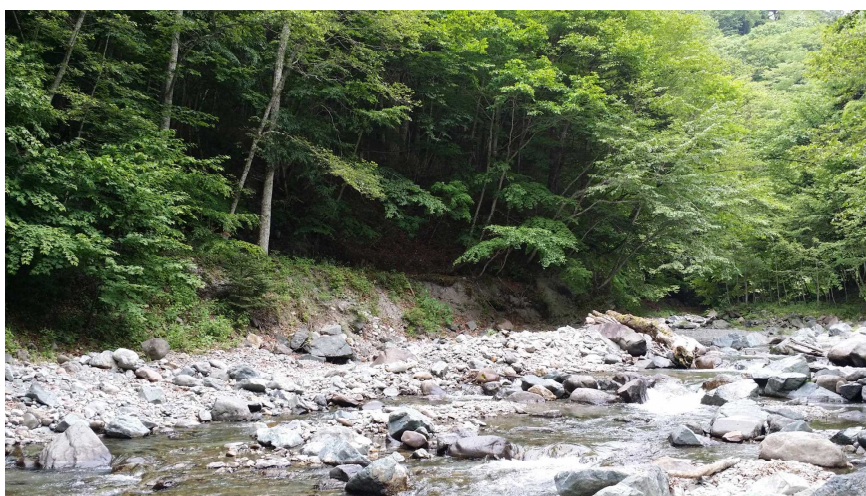


写真3 林道入口から30分程か。右岸少し上、林の中に何段かのプラトーがある。図3中のAの場所。鉾山施設跡、貯鉾場跡と判断した。



写真4 プラトーには石垣組の他に、竈跡があった。この少し左の方に、便所跡も。



写真5 プラトーにあった貯鉱とスラグの山。



写真6 写真5の接写写真。鉱石と加熱で黒くなったズリが山積していた。文献中に、「・・・鉱石は鉛・銀であったが、現場付近で薪炭による原始的な方法で精錬され、その鉛は・・・その当時の鉱石及び鉱滓等は門森沢溪流の河岸（第5図×の場所）で現在でもなお見られる」の記述がある。「現在」と言っても60年以上前のこと。



写真7 鉾山施設跡から沢の右岸を登り上がり、砂防ダムの上流に立った。下流側を見ての一枚。

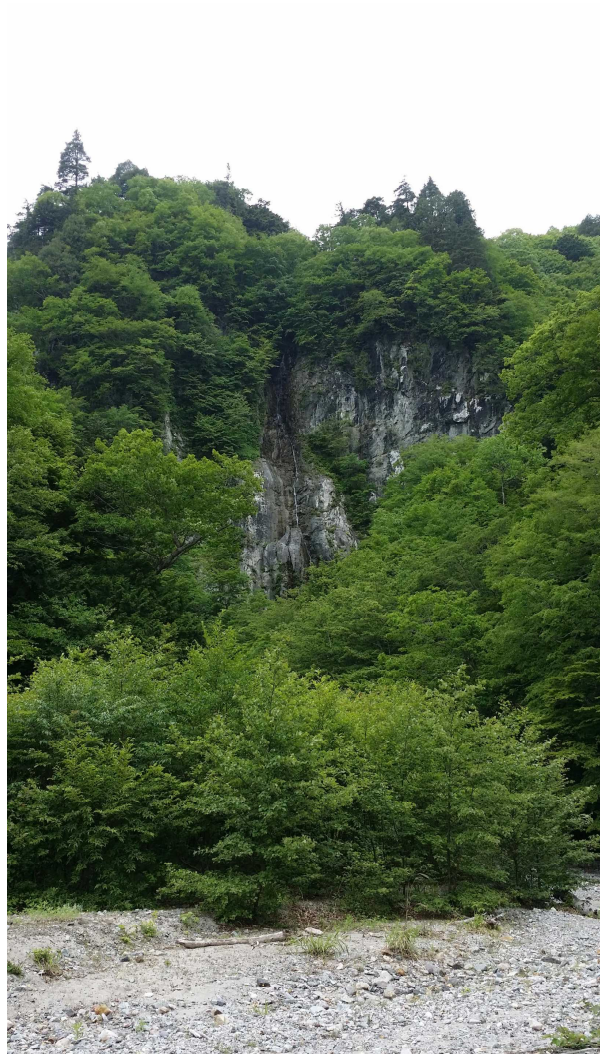


写真8 写真7を撮った場所で、上流を振り向いての一枚。垂直岸壁の中央で、上から下に、白い細いものが微かにうごめいていた。滝である。一瞬。南アメリカのギアナ高地にあるエンジェルフォールを思い出した。見難いが、拡大すればよくわかろう。文献には「・・・大樽では、西方からの支流が数10mの瀑布となって門森沢に落下しており・・・」の文がある。この滝のことであろうが、数10mどころではないと思うが。滝の上下が木々の葉で隠されている。落葉時で、水が涸れていなければ、見事な滝が見えよう。



写真 9 2 回目の探査での最前進地点。小さいよどみであるが、少し深い。両側は断崖絶壁。手がかり足がかりもない。腰当たりまで濡れるのを覚悟すれば、徒渉できるであろう。が、倒木を置く方法もあるか。前進を断念。坑口跡らしい地点まであと 200 m 程。

採集鉱物写真



写真 10 方鉛鉱豊富な塊。ハンマーで割ってできた劈開面は銀光り。

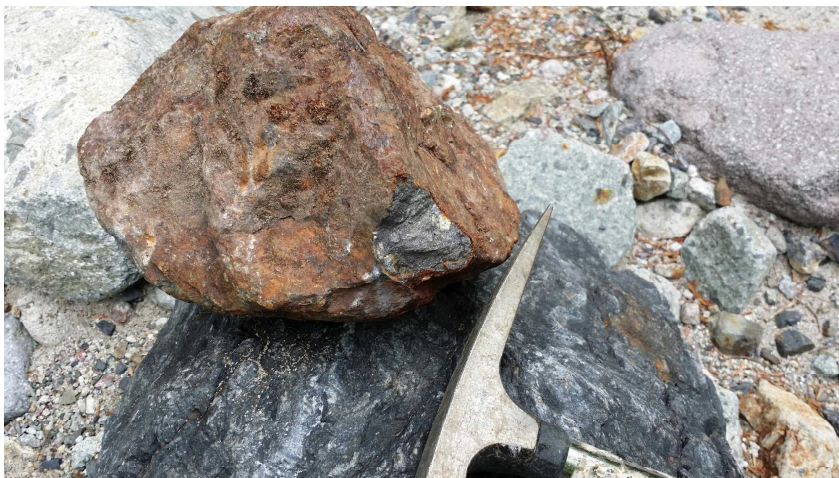


写真 11 同じく方鉛鉱豊富な塊。結構大きい。もったいないので、ほんの片隅だけをハンマーで打ちかく。

参考文献

(1)「地下資源調査報告書 第 2 号」、栃木県、昭和 28 年？。